

ロシアの人口移動（十八—二十世紀）とその特色

中 村 泰 三

は じ め に

わが国では一般にシベリアの開発に伴うシベリアへの、つまり西から東への人口移動を中心としたロシアの東部への人口流入が知られている。しかし、シベリアの開発、それによる多数の人口流入現象の発生は、ロシアの人口移動による辺境の開発の歴史からみると新しい。また、ロシアの人口移動を新大陸を含む海外への人口移動も考慮すると、総合的な観点からロシアの人口移動の考察が可能となる。ここでは前記を視野に入れて三世紀にわたるロシアの人口移動の特色を探ってみたい。

ロシア民族居住地の中で辺境に位置していた小公国から出発したモスクワ公国がモンゴルの征圧下で徐々に力を貯え、近隣の公国を次々と併合し、モスクワ大公国、ロシア帝国へと発展する。一方、十六世紀後半にはカザン汗国の征服によりロシアの東方への進出が加速され、南方へはドンコサックとの合併条約調印以降、黒海沿岸まで国力を伸張させていった。それとともにロシア人を中心としたスラブ系諸民族のロシアの新領土への殖民が顕著な現象として現れてくる。しばしばロシア人の民族性のひとつとして放浪癖が挙げられるが、国土の

拡大とともに顕著になった特性であった。

ロシアのヨーロッパロシア中部からの人口拡散は十六世紀からであるが、ここではこの現象が顕著になり、数量的把握が可能な統計資料が出てくる十八世紀から現在にいたるまでのロシア人を中心としたロシア領居住の諸民族の国内および国外への人口移動の数量的把握とヨーロッパ諸国と比べて見られるその特色、また、海外からの外国人移民について検討してみたい。以上の三点を一、ロシア革命まで、二、革命後からソ連崩壊まで、三、ロシア連邦成立後の千九百九十年代に分けて見てみる。

一 十八世紀の人口移動

十八世紀の国内での人口移動で目立つのは、ヨーロッパロシア中部からロシアの新領土となった辺境地帯への人口流出である。統計から見て十八世紀に約百七十万人が辺境に移動したが、その移出先は東部の沿ボルガ中、下流部、中央黒土地帯東南部、ウラル山地西部である。この時代はベーリング海峡、オホーツク海に至るシベリアの大部分がロシア領になっていたが、シベリアへの移民は限られていてシベリアの人口増は主に高い自然増によるといわれてきた。一方、移民は

ヨーロッパロシア中部、北西部、中央黒土地帯北部の出身者であった。ヨーロッパロシア中部から辺境への移動は非合法的逃亡のほか法的に許可された移動により生まれたが、非ロシア人の移動もすくなくなかった（タタール人の沿ボルガ中流部から沿ボルガ下流部への移動のように）。しかし、全体として十九世紀に比べて流出地の人口増の圧力が少なく、移動規模も少なかった。

海外への人口流出および海外からの流入は国内移動の規模に比べて少ないが見られた。そして、海外への動きにロシア人はほとんど関与していない。海外からの流入は約十万で、ドイツ人の殖民^②（千七百六十年以降沿ボルガ下流部、ノボロシアに四万）およびモルダヴィア、セルビア人の流入（ノボロシアに六万人）である。海外への移民はクリムタタールのトルコへの二十万人の流出と二十万人のカルムイク人のジューンガリアへの帰還が中心で、その他に一人といわれるザパロージエコサツクと少数の旧教徒のダブルジャ、ガリツィア、プロビナへの流出が見られた。

二 十九世紀から革命時まで

1 国内

十九世紀前半ロシアの辺境地域への人口の移動数は増大し、三百万人を越える人々がヨーロッパロシア北部、中部などから南部、東部に流出した。表1から見ても明らかのように、当時は南部のウクライナの新ロシアへの移動が中心で、百二十万人余りが移動した。しかし、ノボ（新）ロシアへの移民の比重は千八百年代初めより減少している

表1 ロシアの主要植民地域への移民数とその比重（1782～1858），1,000人

	1782～1795		1796～1815		1816～1835		1836～1850		1851～1858		1782～1858	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
ノボロシア	180.1	56.5	437.1	47.8	532.8	50.9	272.0	28.6	88.5	27.4	1,510.5	42.5
北カフカス	51.3	16.1	100.9	11.0	139.3	13.3	185.2	19.4	88.0	27.3	564.7	15.9
下沿ボルガ	56.4	17.7	205.1	22.4	101.2	9.7	117.5	12.3	13.2	4.1	493.4	13.9
南ブリウラル	30.8	9.7	138.7	15.2	132.8	12.7	144.4	15.2	22.8	7.1	469.5	13.2
シベリア	—	—	33.2	3.6	140.6	13.4	232.9	24.5	110.1	34.1	516.8	14.5
計	318.6	100.0	915.0	100.0	1,046.7	100.0	952.0	100.0	322.6	100.0	3,554.9	100.0

カプーザン、ロシアの移出入民（18世紀～20世紀初）による。

が、それでも千八百三十―五十年代に全移民の四分の一強をしめていた。

一方、ロシアが北カフカスの山岳民族を征圧したことから、北カフカスへの人口移動が盛んになり、千八百三十年代以降全移民の五分の一を占めるようになった。また、シベリアへの移民が増加し始め、千八百三十年代以降全体の五分の一ないしそれ以上を占めるまでに成長した。これに対して沿ボルガ下流部や南ブリウラルでの減少が顕著であった。

十九世紀の後半ロシア辺境への移民数は増大し、四百万人を越えるまでに増加した。シベリアへの移民が百三十万人を越え、ノボロシアの百万人を凌駕した。また、ロシアの東南方向への進出により、カザフスタン、中央アジアへの

移民が始まり、四十万人を越え、全移民の十分の一強の比重を占めるようになった。^④しかし、ラーシンが指摘しているようにこの期はカフカスでの人口増加率はシベリアより高かった。^⑤

十九世紀末から革命までの辺境地への移住者は約二十年という短期間にもかかわらず、五百二十万人の大規模移民を数えた。^⑥この規模は千八百七十年代から二十五年間の移動三百八十余、十九世紀初めの百万人余に比べて際立っていた。

移民の流れの主要方向は二百五十五万を数え、国内で第一位となったシベリア、ロシア極東地方であり、第二位は百四十万余のカザフスタン、中央アジアへの移民である。つまり東部と東南部のアジアへの移動であり、次いで北カフカスで、ノボロシアへの移動は急速に減少、南プリウラルは流出超過となった。要するに全移民の四分の三の移住地をアジアで占めるにいたったことで、十八世紀末から十九世紀半ばまでのウラルを含むヨーロッパ部で全移民の六分の五を占めた時代に比べて大きな変化であった。

2 外国への移住と外国からの移住

一般にロシアの人口移動や移民に関してわが国で著名なのはシベリアへの移動であるが、海外との交流の大きさは良く知られていない。ロシアがヨーロッパに属するか、またアジアに属するのにかについては議論のあるところだが、新大陸への大規模移民からみてロシアはヨーロッパ諸国の一員と認められる。ただし、移民の民族別比重、つまりロシア人のロシア帝国からの海外移住者に占める比率を見る必要はある。十九世紀前半のロシアからの海外移住は西部のポーランド王国か

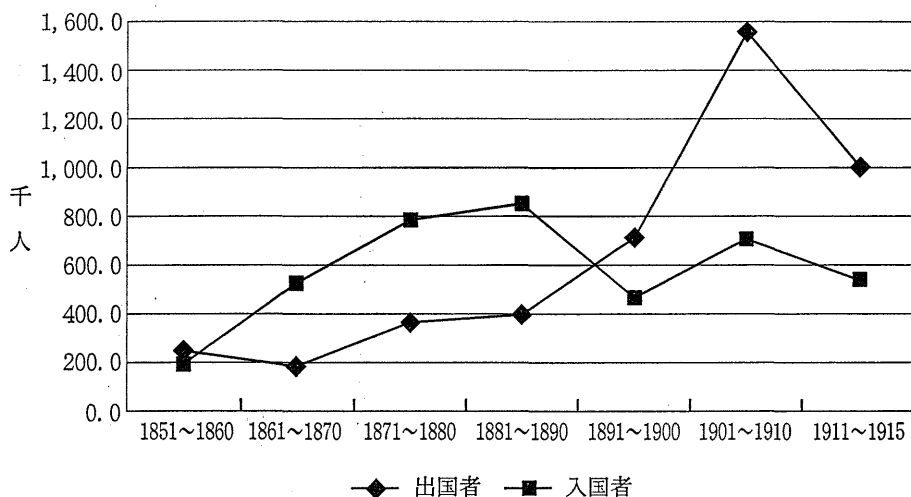


図1 ロシアの移民

カプーザン「18世紀初～20世紀初のロシアの移出入民」M., 1998による。

窓
らで四十万人といわれるが、大半はポーランド人で、その多くは定住せず帰国したといわれる。^⑧

史
これにたいし海外からの移民は四十五万人でその内訳はアルメニア人（トルコからザカフカスへ）二十万人、ブルガリア、ガガウス、ギリシャ人（トルコからノボロシアへ）十三、五万人、ドイツ人十一、五万人である。十九世紀後半海外との人口交流は発展し、海外への移民約百九十万人、海外からの移民二百八十万という百万単位の流出入となった（図1）。

海外への移住のうちもっとも多いのは新大陸への移住で百万人台を数えたが、ユダヤ人、ポーランド人、ドイツ人が中心であった。その他はタタール人二十万人のトルコへの出国、西カフカス山地民四十万人のシリア、レバノンへの出国があった。なおドイツ、デンマークを中心とした諸国へ季節労働に出かける人々が増加しているが、ここでは触れない。

海外からの流入者は流出者より多いが、ドイツから百十一万、オーストリア・ハンガリー帝国からの七十六万人が中心で、他にペルシャ（アゼリ人）、トルコからであった。

二十世紀初めから革命時までの海外との移出入者の流れは、それ以前に比べてさらに拡大、発展している。特に、千九百一十年に増えている。新大陸への移民が中心で約三百万人を数え、そのうちアメリカ合衆国へは二百五十万人を超えた。民族別ではポーランド人が多いが、ロシア人は少ない。たとえば、千九百年と十三年にロシアからアメリカ合衆国への移民は約二百三十万人であるが、ロシア人は十六、三万人で、十パーセントに満たない。^⑨

十九世紀末から革命までの海外からの移民は千九百一十年に七十一万人を数え、ペルシャからアゼリ人、トルコからアルメニア人が主に流入した。また、千九百一十五年に五十四万人（ペルシャ、中国が中心）が流入した。

十九世紀の人口移動は前世紀と異なり、公の許可を得て、合法的に移動する人々が一部の地域を除いて主導的役割を果たした。また、国内移民の出身地は中央黒土地帯、ウクライナ左岸地域、ボルガ中流域などが中心で、西部のポーランド王国、西ベロルシア、ウクライナ右岸からは新大陸への移住とドイツへの季節労働者が中心であった。

三 革命勃発からソ連崩壊まで

七十余年にわたるこの期間は国内移動に関して、1 独ソ戦まで、2 独ソ戦後から千九百六十年代まで、3 停滞の時代からペレストロイカ期までに区分して眺めて見る。この区分は各期間に国内移動および海外への移民の動きに変化が見られることによる。

1 国内移動

独ソ戦まで

革命政府の樹立、その後の国内戦の時代はソ連国内の人口が約七百万人減少（一九一七年の一億四千三百五十万人から一九二二年の一億三千六百八十万まで）した激動の時期であった。^⑩これは内戦、飢饉による死亡者、それを逃れて外国へ脱出する人々によるものであった。

その後のネップによる経済復興、ネップに次ぐ工業化時代（五カ年計画期）にはいってソ連の辺境地域を含む各地の工業化の促進とともに

人口移動現象が活発化している。具体的には農村から都市への移動であり、また、ヨーロッパ部からシベリア、カザフスタン、中央アジアへの人口移動であった。この移動の流れはきわめて大きく一九二六—三九年のセンサス期間にシベリア、極東地域へ四百四十万人が移動し、この数字はこれまで三百年間のこの地域への移動数に等しいといわれるほどであった^⑩。また、中央アジアではカザフスタンへの人口流入が多かった。一九二六—三九年のカザフスタン人口はほとんど増加していない（六百二、五万から六百八、二万人）が、この期間カザフ人が集団化、定住化、飢饉、外国への脱出により約百八十万人も減少しているので、百万人以上の人口が流入したと思われる^⑪。また、労働者、農民としてやってきた人々だけでなく、クラーク（富農）、「人民の敵」とみなされた人々の流刑、朝鮮人のロシア極東からの集団強制移住などにより来住した人々が多く、これらの人々で五十万人を数えている（たとえば、朝鮮人だけで約十万人）。このような状況から五百万人を超える人々が東部、東南部へ移動し、その大部分はヨーロッパロシアのロシア人を初めとするスラブ諸民族であった。

独ソ戦から一九六十年代まで

この時期は独ソ戦による西部から東部への施設、人員の疎開、また強制移住と戦後の復興、東部開発により人の動きは活発であった。独ソ戦中ソ連東部、東南部へ短期間に多くの人数が移動した。全体で二千五百万人が中央アジアを含む東部に移ったといわれ、カザフスタンだけでも百万人といわれた。カザフスタンでは北カフカス、クリム、ボルガドイツなどからの非ロシア人の強制移住者（八十二万人といわれる）が目立っていた^⑫。

独ソ戦終了後、東部への疎開者が西部へ帰還する動きが活発であったが、残留した人々も多かった。それとともに西部から東部、東南部への殖民はカザフスタン、シベリア、極東地方の鉱工業、農業の開発に伴う人口移動であった。カザフスタンの農業移民は一九五四年から三年間で六十四万人を数えた^⑬。カザフスタン全体で百万人以上の人々が西部、主にヨーロッパロシアからの移住者であった。

六十年代の移動の流れの特色はこれまでとは異なる一部の地域で逆の移動が生じ始めたことである。東西シベリア、特に西シベリアで人口流出が生じた。一九五九—六九年の西シベリアの純流出は七九万人、東シベリアで一四万人で、極東地方のみが一四万人の純流入を示した。他方、カザフスタン、中央アジアではそれぞれ七九万、四六万人の純流入であり、北カフカスも同様であった。しかし、ザカフカスでは純流出が生じている^⑭。これは六十年代からグルジアでロシア人の減少、流出がこの期に生じたことと関連している。

停滞の時代からベレストロイカ期まで

停滞の時代といわれるブレジネフ期とベレストロイカ期を含むこの時期は人口移動の規模と流れの方向でそれまでの時期と著しく異なる変化が見られる。ヘレニアクという転換点がこの時期であり、ロシア史に見られる人口移動の遠心的傾向が一九七十年代中ごろのヨーロッパロシアへの求心的な動きに変わる^⑮。これは低テンポの経済発展、ベレストロイカ末期の民族紛争によるロシア人の本国への帰還による。シベリア、極東地方では人口流出傾向が劣悪な生活条件もあって続き、カザフスタン、中央アジア、ザカフカスでは民族紛争により生活、生存へ不安感を感じたロシア人を中心としたヨーロッパ系諸民族

のロシアへの移動があった。先のザカフカスのグルジアでのロシア人の減少の動きは七十年代アゼルバイジャン、八十年代アルメニアからのロシア人の流出、減少となって現れた。この動きはモルドバ、中央アジアでも生じた。特に、農村で顕著でアゼルバイジャン、アルメニア、ウズベキスタンでロシア農民が五十パーセント減少、グルジアで三分の一、トルクメンで四分の一、モルドバ、カザフスタンで五分の一減であった^①。

その結果、七十年代末から一九九一年のソ連崩壊までソ連の中でロシアは先の数十年間に比べ約百五十万人の人口流入超過国となった。それに対して、カザフスタン、中央アジア諸国は約三百万人の純流出、ザカフカス三カ国で約百万人の純流出、ベラルーシ、モルドバで約二十万人の純流出であった。人口純流入国はウクライナ(三二万)、バルト三国(約二十万^②)であった。

2 外国への移住と外国からの移住

海外との人口の流出入はロシア帝国末期に比べて少ない。最も多いのは革命後から内戦時の百五十万人〜二百万人といわれる海外移住である。流出国での統計がないので正確には把握できないが流入国の統計からみてムハチェビイの推定によれば、一九二〇―二五年の世界各国への旧ロシア帝国からの移民はおよそ五百二十万人で、この中に独立したポーランドに帰るロシア領居住のポーランド人も多く含まれている(数十万人)。また、一九一七年後のロシアの海外流出者二百万の大部分はロシア人といわれるが、そのうち百万人はポーランド、五十六万人はドイツ、十七、五万人はフランス、一、二万人はラトビア

に移動した^③。

一九二十年代初めには二百五十万人のロシア人が外国に出たが、この中に白系ロシア人が含まれていないといわれる。種々の推定の結果では海外の現地民族と同化していないロシア人は一九二二年六八、八万七七七、二万、一九三〇年四七、五三、六万、一九三六〜三七年三四、五、三八、六万でフランス、ポーランド、ドイツに居住する者が多かった^④。

独ソ戦終了後ロシア、ウクライナで西側諸国に逃れたナチスドイツへの協力者、難民などは十五万人(一九四七〜五一年^⑤)といわれる。

その後海外出国者は激減し、一九六十年代末から増え始める。一九七〜七七年一十七〜十八万人あるいは一九七〇〜八五年三十万人という数字が西側から出されている(ハイトマンによれば、一九四八〜一九八六年四十五万人^⑥)。これら出国者の多くはロシア人ではなく、ユダヤ人、ドイツ人が中心(他にアルメニア、ギリシャ人)で、ユダヤ人の出国はソ連での差別とアメリカのソ連にユダヤ人の出国を認めさせる圧力から、ドイツ人は西ドイツ政府のソ連国民でドイツ人の子孫の出国希望者の受け入れをソ連政府に認めさせたことから生じた。一九七五年のソ連のヘルシンキ条約締結はソ連国内の宗教的圧迫により出国したいと考える人々を勇気づけた。しかし、その実現は遅れ、一九八九年約一万人が出国した^⑦。

ペレストロイカ以降経済的、民族的問題から出国を希望する人々が増え、特に、先述のユダヤ、ドイツ人の出国希望者が急速に増加し、西ドイツ政府が困惑するほどになった。確かに一九八五年の六千百人の出国者が八七年には三、九万、八八年一〇、八万、八九年二十三、

五万、九〇年四五、三万という急激な増加であった。

ソ連への入国者はイデオロギー面での同調者の入国、第二次大戦後のギリシャ内戦によるギリシャコムニストの入国（中央アジア）などがあるが少なく、出国者が圧倒的に多かった。

四 ソ連崩壊以降

一九九一年のソ連崩壊はペレストロイカ末期から生じたロシアの人口移動上の変化、特色を一層明確にすることになった。まず国内の動きから見てみよう。

1 国内の人口移動

既述のようにヨーロッパロシアのロシア人の主要居住地域を中心としたロシア帝国およびソ連領での人口の遠心的な流れは一九七〇年代から南部辺境—ザカフカス、中央アジア地域からロシアへの逆の動きが生じ、ロシア国内ではヨーロッパロシア中部、ウラルで人口流出超過が続いた。さらにペレストロイカ以降シベリア、極東地方から西への移動が加わってくる。

人口純流出は東シベリアを第一としてシベリア、極東地方で見られ、さらにその勢いが加速している。ここでは一九九〇—九七年七十万という大規模な純流出であった。元来人口の少ない東部の開発地での人口流出は好ましい現象ではなく、ソ連時代も政府の方針に反するこの動きを止めるために、その原因が盛んに研究されたのである。主因は生活水準の劣悪さに帰するが、ペレストロイカ末期からの物資の供給不足がさらに生活を困難にし、ソ連崩壊後の市場経済への移行は

高生産コストの東部地域の鉱工業企業（西シベリアの採油、天然ガス企業などを除く）にとつてきはめて不利な状況となった。

今ひとつの特色はヨーロッパロシアを含む極北地域、特に極東の極北部を中心とした人口流出現象の加速化である。この動きはロシアのみならず、ヨーロッパ、アメリカなどの研究者の注目を引く現象であるが、「近年の新開発空間でのこのようなすざましい人口流出は世界史上例を見ない。より若年で技能労働者として北部地域の条件に適應した人々が立ち去っている。」とする記事、また、「高緯度にある千四百の集落のうち三九〇がまったく存在することを止めた」と指摘しているのはその一例である。^⑧

旧ソ連構成国とロシア間の人口移出入は八十年代、九十年代ともロシアの流入超過である。一方、ロシアでは自然減が続いているので、国外からのロシア人を中心とした流入入口が減少するロシアの人口の減少率を低くする上で貢献してきた。ロシアのどの経済地域も旧ソ連構成共和国との人口移動では極東地方を除いてプラスであり、その純流入者数は一九九一—九八年二百五十万人を越えた（図2）。カザフスタン、中央アジアからの流入者が三分の二を占め、西部地域（ヨーロッパ部）からの流入者は少ない。^⑨これは生活環境、生活水準や民族問題への対応度の差によるところが大きい。

海外（遠外国）との人口交流

ペレストロイカ以降ソ連国民の海外への出国は以前に比べ容易になり、ソ連崩壊後さらにその傾向が進んだ。ロシアでは一九八七年まで年間一万人以下の出国であったが、八八、八九年それぞれ倍増し、一九九〇年に十万人を超え、その後もこの水準を維持している。一九九

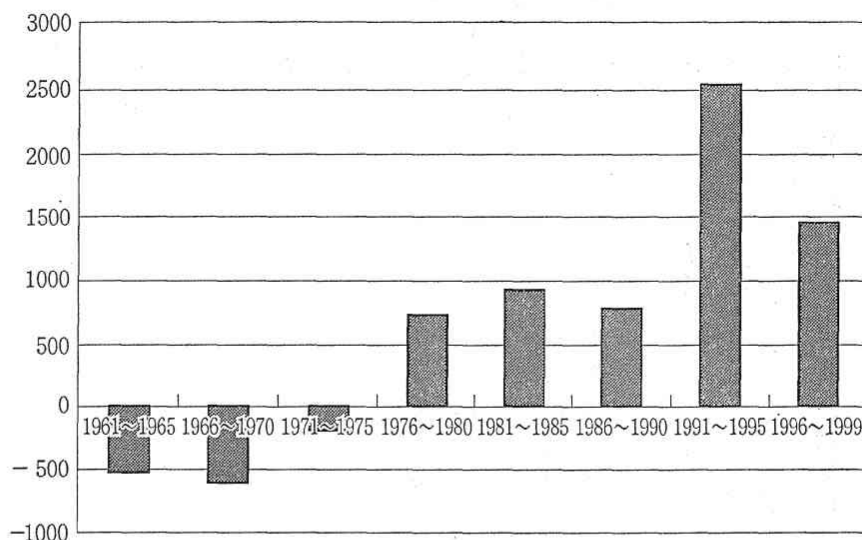


図2 ロシアと以前のソ連構成共和国間の人口純流出入 (1,000人)
「ロシアの人口1997」M., 1998, 「ロシア人口年鑑1999」M., 2000による。

一八九七年に七十万人以上の出国者を数えた。入国者は年間千人以下なのできわめて高い出超である。

出国者の大部分は外国で永住を希望する高学歴で働き盛りの人々で、モスクワ、サンクト・ペテルブルグ市民の出国者が多く、頭脳流出として問題視されていて、その防止策が今も検討されている。彼らのロシアからの流出によるロシアの損失は年三〇億ドル、逸失利益五〇―六〇億ドルとされている。

その他季節労働のための一時的出国があるが、今日年間三百万人を数えるロシアからのツーリストがツーリストビザで出国し、現地仕事を探し、不定期間現地に留まる人々がツーリストの十パーセント程度と推定されている。現に非公式資料では国外で働く人数を六十万人以上とみなしている。^⑤

一方、ロシアに合法的に入国して働いている人々も多い。一九九六年三〇―四〇万人（ロシアに進出した外国企業の従業員を含む）といわれ、建設業がもっとも多く、工業、農業、商業部門も多い。ウクライナからの運転手の出稼ぎで知られる交通部門の従事者もかなり多い。

これらの外国人労働者は当初CIS諸国からの労働者が多かったが、最近はその以外の外国からの入国者が増えている。一九九三年CISからの労働者が全体の四分の三を占めていたが、九六年に二分の一に下がり、それ以外の外国人労働者が二分の一を占めるようになった。^⑥

CIS諸国からはウクライナが多く、CIS以外の国ではトルコ、中国、旧ユーゴスラビアが多い。彼らのロシアでの就労地は中部地域

と西シベリアが中心で、前者で全体の三四、五、後者で二〇、〇パーセントを占めている。なかでもモスクワでの就労者は約七万人と多い。^④

前記数字は公式に登録された数字で、不法入国による就労者は数百万とも言われているが、百万人を越えないという見解が説得性を持っている。たとえば、第五回年次人口報告は五十万人を越えないと見ている。^⑤ 最もモスクワには不法入国の外国人労働者は多く、九八年五十万人と推定されていて、公式登録の外国人労働者の七倍強に当たる。また、極東地方では中国人の不法就労者が多いと言われる。

おわりに

十八〜二十世紀のロシアの人口移動から見える諸特色を次のように指摘する事ができる。ロシアは他のヨーロッパ諸国に比べて、東部と東南部、南部の辺境、未開発地をロシア帝国の発展とともに領土に加えたことから、移民の流れの中心がこれら新領土に向かったことである。

確かに十九世紀後半から二十世紀初めの、新大陸へのロシア帝国国民の移民が増えたが、帝国国民のなかでロシア人の新大陸への移住者は少なかった。また、他のヨーロッパ諸国に比べてロシア人の数の少なさは顕著である。今日でもカナダ、アメリカ合衆国のウクライナ系市民の民族性の維持、活動が目立っている。

今ひとつのかなり著しい特色は外国からロシアへの流入者の多いことである。ドイツ人のロシアへの殖民活動は我が国でも比較的良好に知られているが、アルメニア人の入国者も多かった。同時にタタール、

ノガイ、カルムイク人のロシア領からの流出も目立った現象であった。

これに対してソ連時代の外国との移出入者の流れは帝政時代と比べて少なく、この期の一種の鎖国状態にあったのが帝政時代と対照的である。ソ連時代は国内の移動、シベリア、中央アジアへの移住者が多く、海外移住者は革命時とその直後の時期以外、ブレジネフ時代とペレストロイカ期のドイツ、ユダヤ人の流出が目立ったが、国内移住者数と比べて極めて少ない。

ペレストロイカ末期からソ連崩壊後の一九九〇年代は外国との人口交流で純流入を示した。ソ連時代ロシアと他のソ連諸国との人口交流は概してロシアの流出超過であったが、この期は西側諸国への人口流出が増大した。これはユダヤ、ドイツ人の出国者の増加とソ連末期からのロシア人の出国者の増加による。外国からは中国人の流入増が目立っている。

国内ではこれまでの人口流と逆の流れ、東から西、北から南への動きが生じ、中でも北、北東部からの人口流出の激しさが目立っている。これは社会、経済システムの変革によるが、近い将来もこの傾向が続くと予想される。

註

① Кабузан В. М., Эмиграция и реэмиграция в России в 18 начале 20 века М., 1998 с. 46.

② ドイツ人の殖民についての日本人研究者の最近の論考は鈴木健夫「近代ロシアへのドイツ人入植の開始・ドイツ諸地域からウォルガ流域へ」、『ヨーロッパの歴史的再検討』所収、二〇〇〇年、早稲田大学出版部。

③ 前掲① с. 46—48.

- ④ 前掲① c. 130, 135.
- ⑤ A. Г. Раппин, Население России за 100 лет, 1956, М., с. 74.
- ⑥ 前掲① c. 170.
- ⑦ 前掲① c. 150.
- ⑧ Русские: Этнотерритория расселение численность и исторические судьбы, том 1, М., 1999, с. 155.
- ⑨ Население СССР за 70 лет, 1988, М., с. 17.
- ⑩ Л. В. Макарова, Г. Ф. Морозова, Н. В. Тарасова, Региональные особенности миграционных процессов в СССР, 1986, М., с. 26.
- ⑪ В движении добровольном и вынужденном, 1999, М., с. 136.
- ⑫ 拙稿「ロシア極東地方の人口移動とその特性」(『東アジア研究』第二九号, 二〇〇〇, 所収) 参照。
- ⑬ Русские: Этно-социологические очерки, 1992, М., с. 29.
- ⑭ 前掲① 一三八頁。
- ⑮ 前掲① 一三九頁。
- ⑯ 拙著『現在のソビエト世界』(一九八三年, 地人書房) 参照, 前掲⑬ 三一頁。
- ⑰ Timothy Heleniak, Internal Migration in Russia during the Economic Transition, Post-Soviet Geography and Economics, 1997, 38-2, p. 83.
- ⑱ 保坂哲郎『ソ連経済崩壊と労働力問題』(文理閣, 一九九八年) 二二二頁。
- ⑲ 前掲⑬ 三三頁。
- ⑳ 前掲⑬ 三二頁, 拙論「ソ連に於ける主要民族の人口動態」(『人文研究』四三一九) 参照。
- ㉑ 前掲⑧ 一五五頁。
- ㉒ Н. Федоров, Проблема этносоциальной интеграции иммигрантов из бывшего СССР в германское общество, М., 1998, с. 49.
- ㉓ 同右五十頁。
- ㉔ 前掲⑧ 一六五頁。
- ㉕ 前掲⑧ 一六六頁。
- ㉖ S. Heitmann, Soviet Emigration in 1990: A New Fourth Wave?, Soviet Jewish Affairs, 21-2, 1991, p. 12.
- ㉗ 前掲⑧ 一六九頁。
- ㉘ Ю. Н. Голубчиков, Население земного шара, География в школе, 2000-2, с. 21.
- ㉙ Т. Heleniak, Out-Migration and Depopulation of the Russian North during the 1990s, Post-Soviet Geography and Economics, 1999, 40, No. 3, p. 201.
- ㉚ ロシア統計年鑑「人口」。
- ㉛ Экономика и жизнь, 1997-11.
- ㉜ 前掲紙一九九七一一六。
- ㉝ 同一九九七一四七。
- ㉞ 同一九九七一三九。
- ㉟ Население России 1997, М., 1998, с. 130.
- ㊱ Р. Я. Бакиров, М. Т. Романов, А. В. Мошков, Изменения в территориальных структурах хозяйства и расселения Дальнего Востока при переходе к рыночной экономике, 1996, Владивосток с. 152.
- (訳註) 小論を書き終るつかぬ。Население России XX века, том. 1, 1900-1939гг. М., 2000. を入手した。これまづ手のつけられることのすくなかった諸点を取り上げられ、明らかにされている。例えば、一九一七—二〇年の外国への流出者を約二百万としていること、農業集団化によるクラーク(富農)流刑者数を一九三二年約百三十一万人、一九三九年百一十七万人、大粛清期のラーゲリ収容者数を一九四〇年百三十四万四千人とし、その地域別分布も明らかにしている。次の機会にこの資料を分析、利用してさらに研究を深めていきたい。